

# 第2回宇治市総合教育会議議事録

日 時 平成29年3月29日(水) 午前10時00分 開議

場 所 宇治市役所 特別会議室

## 次 第

- 【1】 開会
- 【2】 市長あいさつ
- 【3】 日程 宇治市教育委員会と地元大学との連携について
  - ・京都文教大学、京都文教短期大学との連携
  - ・京都大学(宇治キャンパス)との連携意見交換  
その他
- 【4】 閉会

## 出 席 者

宇 治 市 長 山 本 正

### 宇治市教育委員会

委 員 長 加 賀 爪 毅  
委員長職務代理者 金 丸 公 一  
委 員 小 山 栄 子  
委員(教育長) 石 田 肇

### 宇治市教育委員会事務局

部 長	澤 畑 信 広	録(兼生涯学習課長兼生涯学習センター所長)	藤 原 千 鶴
教育支援センター長	瀬 野 克 幸	教育総務課長	縄 手 弘
一貫教育課長	金 久 洋	教育支援課長	富 治 林 順 哉
一貫教育課副課長	市 橋 公 也	教育支援課副課長	海 老 瀬 正 純
一貫教育課総括指導主事	辻 弘 一	一貫教育課指導主事	姫 野 友 美 子
一貫教育課学校教育指導主事	山 花 啓 伸	一貫教育課学校教育指導主事	大 越 房 数
一貫教育課学校教育指導主事	河 野 恒 久	教育総務課企画庶務係長	上 田 ひ と み
教育総務課主任	高 木 紗 代 子		

開 会 (午前10時00分)

## 【1】開会

## 【2】市長あいさつ

### <市長>

今年度、第1回目の宇治市総合教育会議では、京都府の教員の研修・研究施設であります京都府総合教育センターを会場として、同センターの持つ機能や事業を確認するとともに、本市の役割や課題を明確にし、本市の教育支援センターのより効果的な充実発展に向けて意見交換を行っていただいたところである。

本日の会議では、「宇治市教育委員会と地元大学との連携について」ということで、市内にある京都文教大学及び京都文教短期大学、並びに京都大学宇治キャンパスとの連携や取組の現状と課題などについてご説明いただくとともに、今後の連携のあり方や充実方策などについて意見交換を行っていければと考えている。

## 【3】日程

### 宇治市教育委員会と地元大学との連携について

#### <事務局>

本市は、市内に在る京都文教大学・京都文教短期大学、そして京都大学宇治キャンパスと連携協定を結び、現在様々な分野、領域で本市ならではの特色ある取組を進めている。教育の分野においても、それぞれの大学と本市の間で協力する旨の協定も結んでおり、それに基づき市教育委員会と大学でも連携した取組を行っているところである。

そこで第2回総合教育会議では、現在進めている市教育委員会と地元大学との連携の状況について報告する。

まず、京都文教大学並びに京都文教短期大学については、まちづくり、教育・文化、子育て支援などの分野において相互に協力し、地域社会の発展と人材育成に寄与することを目的に協定を締結しており、市教育委員会では、その一つとして、本市の小中一貫教育の特色ある教育活動「宇治で学ぶ 宇治を学ぶ 宇治のために学ぶ」をコンセプトとして進めている「宇治学」について、本市の地域素材や地域活動を取り入れた学習を大学と共同で研究し、平成26年度より重点単元設定の検討を、平成27年度からは副読本編集作業と教員研修に取り組んでいる。また、この2年間は市教育委員会事務局職員による大学授業での講義も行っているところである。「宇治学」の詳しい取組状況については、担当指導主事より報告する。

「宇治学」は、一般的に使われている「郷土学習」と混同されることがあるが、単なる「郷土学習」ではない。「宇治学」の位置づけは、総合的な学習の時間であり、「宇治で学ぶ 宇治を学ぶ 宇治のために学ぶ」をコンセプトに学校の特色や地域性を活かし、児童生徒の探究的な学習を進めていく。探究的な学習は、課題設定、情報収集、整理・分析、まとめ・表現の4つの学習過程を辿る。

まず、児童生徒自身が課題を設定し、次にその課題解決に向けた行動計画を立て、調査を実施、さらに調査結果をまとめ・整理する中で意見や考え、わかったことを共有し、最

後は課題についての自分たちの考えを様々な方法で発信していく。こういった探究的な学習の効果や成果は、平成28年度全国学力・学習状況調査において『授業で自ら考え、自分から取り組んだと思いますか?』という質問項目に『思う』と答えた児童生徒が高い平均正答率であったことから明らかになっている。この探究的な学習は、次期学習指導要領においても重要な位置付けとなっている。

次に、次期学習指導要領改訂の重要点を挙げていく。まず、カリキュラムマネジメントであるが、教育課程を各校の教育目標の実現に向けた教科横断的視点で組み立て、実施状況の評価から改善を図り、体制確保と改善を図る視点で学校運営をするものである。2つ目は、学習指導要領における枠組の見直しであり、知識・技能、思考力・判断力・表現力等、人間性といった資質・能力が三本柱となっている。そして、最後の「主体的・対話的で深い学び」は、これまでアクティブラーニングと表現されていたが具体的な表現に変え、指導者別の「何を教えるか」といった見方から児童生徒別の「何ができるようになったか」に主眼を置いた授業改善が重要であるとされている。本市では、時代の潮流を見極め、先んじる動きとして、平成27年度から「宇治学」副読本作成に着手した。とりわけ、最新の情報を得るために、京都文教大学の先生から多大な協力を得た。次期学習指導要領改訂の背景には、平成32年の大学入試制度の改定がある。また、それに伴い教職免許法の改正、大学ではアクティブラーニングが必須科目となることから高等学校教育は変革を迫られている。これらのことから、総合的な学習の時間における共通教材の作成が推奨されており、これは正に「宇治学」副読本のことである。このように、「宇治学」副読本作成は時宜を得た取組であり、全国でも初の探究的な学習の導きとなる副読本を間もなく配付する。

「宇治学」副読本について説明する。まず、狙いは、次期学習指導要領における探究的な学習を導き、学びの具現化を支援することや、学習内容・学習方法が違う児童が1つの中学校に入学する分散進学で派生する課題や、小中一貫教育としての視点を持つこと。そして、総合的な学習の時間の内容は各学校に任されており、地域独自のプログラムを作成する必要があるが、初任者や若い教員、本市以外の出身者など本市に馴染みが薄い教員には、プログラム作成がより一層負担となることは否めない。そこでこの副読本は探究的な学習のヒントとなり、教員の負担軽減の一助になる。また、「宇治学」副読本の各学年テーマは、3年生：宇治茶、4年生：環境、5年生：福祉、6年生：宇治の魅力（自分たちが住む町の魅力）、7年生：防災、8年生：キャリア、9年生：これからの宇治市（宇治市への提言）を計画している。ただし、小学3年生・小学6年生以外のテーマは、（案）の段階である。そして、「宇治学」副読本には、「探究的な学習の方法」つまり「学びかたを学ぶ」、「正解がない」学びから「自分で見つけ、調べ、考え、発信」することにより自己有用感を育てる、地域の良さを見つける、「ふるさと宇治」をより良くしていこうとする人々に気がつく、社会参画する態度を育むことができるようにと、願いを込めて作成している。

「宇治学」副読本の各学年の活用開始時期は、小学校3・6年生が平成29年度から、小学校4年生・中学校1年生は平成30年度から、小学校5年生・中学校2・3年生は平成31年度からとなる。また、各学年の「宇治学」副読本の活用開始時期に合わせ、教員用指導の手引きの作成も行う。平成29年度は、平成30・31年度の活用開始に向けて

5 学年分の編集作成があり、事務局会議・編集委員会等だけでも年間 100 回以上の会議・協議を予定している。それ以外にも、昨年夏に教員対象の「宇治学」実践講座と題した教員研修を実施した。研修内容は、思考ツールを用いたグループワークや、フィールドワークを行い、整理・分析、まとめ・表現までを実際に体験してもらうものであった。その他に、『「宇治学」先生のための宇治茶研修講座』、趣旨や内容の説明『「宇治学」副読本研修会』を実施している。

「宇治学」副読本の完成はスタートと考え、有効に活用し、児童生徒が生き生きと探究的な学習が展開できるような支援が必要である。今後も、京都文教大学との連携を図りながら、「宇治学」を学んだ児童生徒が、将来「ふるさと宇治」を愛し、「ふるさと宇治」で活躍してくれることを願っている。

次に、京都大学宇治キャンパスとの連携について報告を行う。

近年、児童生徒の「理科離れ」「理科嫌い」が言われ、本市でも全国学力・学習状況調査などの結果から、同様の傾向が見えてきている。そこで、「小・中学校の理数系教育の底上げを図る」「世界最先端の科学研究機関である京都大学宇治キャンパスとの連携を進める」「科学に夢と希望を持つ人材の育成を目指すために、『自分の感性を大事にしながら疑問に思うことを追究する学びの意欲』を高める」などの課題を整理し、事業企画の目的を「科学に夢と希望を持つ人材の育成を目指して、本市の小・中学校の理数系教育の底上げを図る」とした。

京都大学宇治キャンパスとは、まちづくり、教育の振興、防災・災害対応、広報等の分野において相互に協力し、本市における地域社会の発展に資することを目的に協定を締結している。市教育委員会では、「子どもたちの理科離れ」が叫ばれる中、科学に夢と希望を持つ人材の育成を目指して、理数系教育の推進及び理数系教員の力量向上にむけて共同して研究し、取組を進めているところである。

京都大学の宇治キャンパスとの連携では、スクール・サイエンス・サポート事業と銘打ち、5 つの柱で活動を進めた。

1 つ目は、教員研修である。「世界最先端の科学研究機関である京都大学宇治キャンパスの研究室を見学し、科学研究活動の一端を知ることによって教員の見識を高め、本市の小学校や中学校の理科教育の向上を図る。」をねらいとし、理数系教員のスキルアップ、意識向上を図った。昨年度は小学校教員を対象に、無線電力伝送の実験室を見学し、担当教授から「研究内容と実際の社会への研究成果をどのように活かすか。」という話を聞き、教員からは「このような経験を児童にもさせたい。」などの感想があった。今年度は小学校教員対象の研修会に加え、中学校教員対象の研修会も行った。

2 つ目は、小学生施設訪問学習である。これも昨年度から行っており、平盛小学校の 6 年生が防災研究所、西大久保小学校の 5 年生がエネルギー理工学研究所を訪れ、災害を起こす自然現象の体験や、電磁石に関する実験を行うなどの体験学習を行った。児童からは、「実験をして楽しいだけでなく何故そうなるのかを、学ぶことができたのがいい経験でした。今日教わったことを活かして夢を追い、京都大学に受かるようにしたいです。」などの感想があった。1 月 24 日に南小倉小学校の 5 年生がエネルギー理工学研究所の先生に

お世話になり、先生の指導により、電磁石の性質を利用した実験を一人ひとり行い、その後、巨大なプラズマ実験装置を見学した。他には、3月22日に北小倉小学校の5年生が、化学研究所の先生による「ペーパークロマトグラフィによる混合物の分離」体験学習を受け、科学に興味を持つきっかけとなった。「理科離れ」と言われて久しいが、本市にある世界最先端の研究施設の見学をすることにより、本物を見る、体験する、そして児童生徒の興味関心をくすぐるものを与えることが大切であると改めて認識した学習でもあった。

3つ目は、小学生理科教室である。これまで実施されていた「宇治川水域採集大会」を見直し、「自然に親しませ、身の回りの環境に関心をもたせ、自然を愛する心情を育てる。自然の事物・現象についての科学的な見方や考え方を養う。」ことをねらいに、大学と連携という形で今年度から再スタートした。第1回目は、宇治キャンパスを会場に実施し、市内の小学校の5、6年生が152名参加した。参加した児童の知的好奇心が高まったように感じている。

4つ目の活動は、中学生理科教室である。これは今年度からの取組で2月7日に黄檗中学校を会場にして、京都大学生存圏研究所の研究者に出前授業をしていただいた。授業参加者は中学校の理科部や科学部の部員で、第一線で活躍している研究者から専門的な話を直接聞くことで、「自然に親しませ、自然の事物・現象についての科学的な見方や考え方を養うとともに、自然を愛する心情を育てる。」「科学の最先端の研究に触れることにより、科学への興味を高め、科学に夢と希望を持つ人材育成を目指す。」というねらいであったが、日頃他校との交流がない理科部、科学部の部員同士の交流の場にもなった。

5つ目は、幼稚園出前授業である。これは、当初計画はしていなかった取組だが、東宇治幼稚園は京都大学宇治キャンパスと隣接しており、園児に昆虫への興味を持ってもらおうと企画した。11月18日に東宇治幼稚園で「シロアリの不思議な世界」をテーマに、わかりやすく面白い話をしていただいた。

昨年度から始まった京都大学宇治キャンパスとの連携は、今年度は様々な対象・内容について取組を行ってきた。これらの取組を総括し、内容や方法など改善を図り、継続した連携を取り組めるようにしていきたい。「子どもたちの理科離れ」が叫ばれる中、科学に夢と希望を持つ人材の育成を目指して、理数系教育の推進及び理数系教員の力量向上に向けて共同で研究し、取組を進めているところである。

## 意見交換

### <委員>

「宇治学」副読本の作成は、京都文教大学と協力して作成され、内容的にも宇治を考えて作成されたことが良く分かった。副読本作成終了後、京都文教大学とはどのような連携を検討しているのか。

### <事務局>

平成30年度に編集作業が終了、その後の連携については検討の段階ではあるが、大学の研究に資するものであり、且つ、本市の教育にプラスになることを展開していきたいと

考えている。

#### <委員>

0の状態から100回以上会議を開き完成させた苦労が実り、大変良いものができた。今後、副読本を使いどのような取組をするのかを楽しみにしている。また、機会があれば成果を教えてもらいたい。

#### <事務局>

「宇治学」副読本を活用し、児童生徒が“学び方を学ぶ”生涯学び続ける子どもを育てたいと考えており、その為にも、本市の教育研究員「宇治学」部会にて指導方法等の研究や研修の実施など、まずは教員が指導方法等を学び、深めていくことを考えている。

#### <市長>

「宇治学」副読本に、宇治茶など“宇治らしいもの”が載っており嬉しい。副読本を作成している市町村は他にもあるが、ここまで内容を徹底し、指導の手引まで作成しているものは無く、これは財産である。ただし、教員が立派な指導の手引のねらいについて、どこまで理解が深まっているのか。この理解度は大事なところであり、課題である。他の課題は、京都大学と結んだ協定を活用し、児童が興味を持つ取組を連携して実施することは、理科離れが叫ばれる中での第一歩である。しかし、これらの取り組みを教育課程のどこに位置づけ、本市全体で実施していくのか。現在は、一部の学校、クラスで実施されており、「宇治学」副読本の実施ほどに全校に徹底されているとは思わない。本市全体へ実施していく過程は、検討しているのか。

#### <事務局>

総合的な学習の時間と授業については、各学校から「宇治学」の年度計画等が小中一貫教育の担当にも報告がある。計画等の内容を確認し、指導していきたいと考えている。近年、他府県出身や若い教員がおり、宇治に馴染みの薄い教員でも指導の手引を読めば宇治市のことがわかるように記載していることや、横断歩道では周りに十分配慮しながら子どもたちを渡らせる”渡し方“など、指導の手引には細かいことまで書いており、それらを活かしてもらいたい。

#### <事務局>

京都大学宇治キャンパスとの連携は2年目を迎え、連携の切り口は一部の学校やクラブとなっている。大学教員と市教委の間には、大学教育と義務教育との文化の違いがあるのは否めない。ただ、双方にメリットがあるように連携協力を進めていくなかで、やはり、一部の学校、一部のクラブを切り口に本市の小中一貫教育を通じた理数系の学力向上につなげていくような方向性が必要であると思っている。次期学習指導要領では、“学びに向かう力”を非常に重視しており、次年度の宇治市教育の重点においても、大学連携による理数教育や「宇治学」を通して知的好奇心や探究心を育むことを努力点で挙げている。文化

の違う大学と連携を取りながら、本市の子どもたちの成長につながっていくようなことを考えていきたい。

#### <市長>

本市は、小中一貫教育を強力に進めており、課題もあるが特徴や良さがある。教育現場や学力の面からは定着とはまでは言えないが、学校長や教職員の小中一貫教育を進めていることに対する様が見えつつある。よって、全国的にも初めての取り組みとなる副読本の指導の手引は、どの様に展開すれば小中一貫教育がさらに発展するかということ、進化の段階で、指導の手引と結びつけて発信をしてもらいたい。

教員の指導と児童生徒の学力の習熟度は、並行していかなければならない。むしろ、教員が先に上げていかなければならないという考えを持っている。「宇治学」副読本は、素晴らしいものであり、多くの苦勞の末に完成したという思いを忘れないでほしい。教員の習熟度を上げる研修は大事であり、少し時間を取ってもらいたい。このことがひいては、小中一貫教育を定着させ、将来「ふるさと宇治」を愛すということにつながっていく。また、京都大学のキャンパスが宇治にある喜びを全学校に周知をし、大学連携を通じて小中一貫教育の特徴としてほしい。

#### <事務局>

大学教育と義務教育の連携から何かできるのかということは、連携を始めてから手探り状態である。義務教育の9年間の学びの中で、連携を通じて理科・数学の教育水準が上がるように持っていければと思っている。ただ今は、できることは何かを考えながら本市が進める小中一貫教育の特徴として、京都大学の力が使えるような検討をしていきたい。

#### <市長>

小中一貫教育や京都大学のキャンパスがあることは本市ならではのであり、連合育友会や保護者と連携を深め、このことを親に理解してもらう環境整備は重要である。普段の教育内容は国の画一的な義務教育だが、「宇治学」副読本と京都大学との連携は、本市ならではの取り組みである。小中一貫教育で学力を高め、ふるさとを愛す気持ちを、連合育友会などと連携し保護者にも広める努力を是非してもらいたい。

#### <委員長>

本の色使いがとても良く、文字の大きさまで工夫されてある。貴重な写真も随所に載っており、文字ばかりではない。ところで、本の大きさをA4判より小さくした意図は何かあるのか。

#### <事務局>

これは縦B判・横A判のAB判という形で、最近の小学校の教科書はほぼこの大きさになっており、他の教科書の大きさに合わせている。

### <教育長>

本の色使いも宇治をイメージされており、内容も非常によくわかる。宇治の町には、これだけ魅力があったことを今更ながらに気がついた。実は、昨日のある会議で「宇治学」副読本が話題となり、非常に高く評価をされた。編集作業は、色々な関係団体、市民、市の職員も含めて取り組んでもらった。このことにより編集作業に携わった方全てに、本市の教育、本市そのものに対する興味・関心を引き起こしていただいたことに感謝したい。3月議会の質問で「市の職員であるにも関わらず、市のことを知らないのは具合が悪いのではないか。」とあった。児童生徒はもとより、他府県出身の教員に宇治を知ってもらうツールとして、また市の職員、市民にとっても「ふるさと宇治」を理解してもらう新たなツールになることを期待している。さらに、副読本並びに指導の手引が、教員の指導スキルアップのツールになるように活用してもらいたい。

### <委員長>

取組に対する情報を発信することは、非常に大事なことである。「宇治学」副読本ができたことを、保護者にも知ってもらう工夫ができないだろうか。例えば、副読本を使って保護者と一緒にする課題を出す、授業参観は副読本を使う方法などがある。副読本を通して保護者にも宇治の魅力を知ってもらい、学んでもらうことはもう一つの活用方法ではないだろうか。

### <教育長>

「宇治学」副読本を活用した「ふるさと宇治」の学習が平成29年度から始まることについて、3月発行の宇治市の教育だよりに記事を掲載している。ただ、3月市議会では、「市長の新たな施策として平成29年度から始まるラーニングコーディネーターの取組が、保護者に知られていないのではないか。取組についてもっと啓発し、一貫教育の現状を周知する地道な努力が必要なのではないか。」という指摘があった。当然の指摘であり、情報発信をしていくことは重要である。

### <委員>

京都大学宇治キャンパスとの連携取組を体験した子どもたちの反応を、教員が知ることでも大事だが保護者にも伝えているのか、もしくは考えているところなのか。保護者は、子どもの反応から「京都大学ですごいことしてきたんや。宇治に京都大学のキャンパスがあって良かった。もっと勉強させたい。」というような気持ちになる。子どもたちの反応と保護者への情報発信を含めて教えてもらいたい。

### <事務局>

宇治市の教育だよりは、過去のもので平成27年度の取組について紹介している。京都大学宇治キャンパスのオープンキャンパスが毎年秋に開催されているが、地理的に宇治川を挟んで東側の地域の参加者が多く、去年と一昨年は西側の学校からも参加してもらっている。さらに、大学と連携し児童生徒・保護者への周知を図り、多くの人を訪れ

るようにしていき、こういったことを繰り返す中で、世界最先端技術を持ったキャンパスが本市にあることを浸透させていきたい。

#### <市長>

「ふるさと宇治」について、子どもが保護者と一緒に勉強する環境は、情報発信の絶好の機会ではないか。

#### <事務局>

小学生の親を対象とした講座を毎年生涯学習センターで開催しており、平成28年度は宇治茶をテーマに開催した。平日の昼間ということもあり、20～30名の参加であったが、特に興味を持っている方を中心に参加いただけたのではないか。

#### <事務局>

これまでは作成中であった為、連合育友会の方々と具体的な「宇治学」の取組について話をする機会は無かったが、「宇治学」を知ってもらうことは大切であり、今後は、連合育友会理事会なども利用して紹介していきたい。

#### <委員>

学校教育に関する本市独特の人的・物的資源を活かす取組やそれを保護者に情報発信することなどの重要性については、これまでの説明から十分に理解できた。ただ、保護者を含めた生涯学習部門では、先ほど説明のあった生涯学習センターで実施している取組以外は無いか。

#### <事務局>

生涯学習部門では、平成24年度から大学連携の取組が始まっている。具体的には広野公民館を活動場所とし、「ひろの人形劇」を金毘羅さんのお祭りの日に合わせ、年1回披露している。これは、古くから大久保地域に住んでいる方々の話を採録し、それをまとめたオリジナルの台本を使い、人形劇の専門家を講師に招き、子どもたちが手作り人形を操る劇である。他にも、平成28年度に大学のプロジェクト科目として取り上げられ、平成29年度もプロジェクト科目があり、広野公民館に多くの学生が来館するという広がりをみせている。

#### <事務局>

元々、連合育友会は生涯学習部門の所管であったが、教育支援センター設立に伴い教育支援課の所管となった。現在、教育支援課には連合育友会や青少年健全育成協議会、少年補導委員会があり、協議会・委員会には連合育友会出身者が多く、引き続き地域の様々な活動の中心になってもらっている。以前は連合育友会と所管が異なり連携が取りにくかったが、今後は青少年指導センターを中心に、各団体が連携して取り組める取組を検討していく。

## <市長>

副読本作成者の思いや教育現場で児童生徒を指導した経験者の観点から、この会議の中身は教育現場からずれていないか伺いたい。

## <事務局>

「宇治学」副読本の作成担当として述べさせてもらう。先ほどから市長・委員長が言われている啓発の問題は、非常に大きい問題の一つだと思っている。しかし、予算の関係上貸与となっており、家に持ち帰り保護者にゆっくり読んでもらうことは少々難しいが、情報発信は今後十分やっていかなければならないことだと思っている。とりわけ、「宇治学」の重要点は、地域から学んでいくことであり、作成にあたって大切にしてきたことでもある。地域の方々や家庭の協力を得なければ充実したものにならず、家庭と共に地域の方々への啓発活動に努めたい。

次に、副読本作成に二つ大きく力を割いたことがある。教育の中身は、教員自身がどれだけ中身を熟知し、熟度し、指導していくかにかかっている。これから求められている教育は、与えられた知識の詰め込み、与えられたものをより良く理解をさせていくのではない。学びかたを学び、それを駆使して自ら学び続け、深めていくような子どもたちを育てていくことが非常に重要である。この点において「宇治学」副読本の作成では、宇治について全てを記載し、読んで覚えこませるのではなく、「面白いな、なんでかな、こんなことがあるんや」という十分な興味付けや、学ぶきっかけとなる内容をどれだけ盛り込むかということに非常に力を割いた。二つ目は、調べ方や問題の解決方法といった学び方を学ばせることに非常に力をいれて作成してきた。よって、この二つを教員自身がしっかりと頭に置き、副読本を使いこなしてもらいたいという理由で、必然的に指導の手引を作らざるを得なかった。なぜなら、副読本だけでは「宇治学」の趣旨が教員に伝わらず、副読本を作った意味がなくなってしまうからである。従って、教員はこの副読本を使いこなすために指導の手引を熟読してもらおうと共に、事務局としても今後も京都文教大学の力を借り、教員研修を重視していきたいと考えている。「宇治学」副読本を使って学び方を教えていければ、他の教科の勉強にも発展していく。例えば、算数・数学なら出された問題を解くだけでなく、自分で問題を立て、解決していくための調べ方を自分で見つけるなどのように、他の教科に波及していくことは、ひいては子どもたちの学力向上につながると考えている。「宇治学」副読本の活用は、探究的な学習の波及効果が高く、教員研修などの機会に「宇治学」の趣旨を教員に理解してもらい、教育現場で実践してもらおうことが重要であると思っている。

最後に、小中一貫の観点でもこの副読本の作成を重視している。本市には分散進学があり、同じような学びを育てて中学校へ進学させなければ、中学校で困ることになる。小学校で身に付けるべき力を各小学校で身に付けさせるために共通して教える中身は、教育委員会として責任を持って学校に示す必要がある。こういった力を育てて中学校に進学してほしいということを示す材料に、副読本を考えている。本市の特色である小中一貫教育についてより一層の進化、充実発展のために、この副読本がきっと役立ってくれる、教育現

場からも役立てなければならないという意識で努力してもらえるように、力を割いて学校現場に発信していきたいと考えている。

#### <事務局>

京都大学との理科での連携は、手探り状態で進めている。取組連携を続ける中で、大学教授は、小・中学生を相手に授業をすることに興味を持っていることがわかってきた。実際に施設を見学すると子どもたちだけではなく、教員まで驚きの感想を漏らしていた。こういった意味でも施設を身近に感じられたことは、2年間の取組の中でも大きな成果であった。

ただし、この取組を全校に広げるとなると移動や部屋の問題、講義の形式など色々な課題が出てくる。取組をどういう方法で広げていくのかは、出前講座も含めて大きな課題である。「施設を見せたい、見学させたい」という思いがあるが、それは秋の大学のオープンキャンパスを活用し、大学が困るくらい本市の小・中学生が参加し、さらにはこのことが大学を動かすことになるかもしれない。

#### <市長>

この会議の場で、教育内容に言及したここまでの論議は初めてであるが、非常に大事な事であり、今後とも忌憚のない意見を積極的に発言いただけるような会議の運営を行っていきたい。本日の総合教育会議は地元大学との連携について、その取組状況などを資料やパワーポイントを使って説明がされ、それに基づいた意見交換を行ってもらった。紹介のあった3つの大学・短大と協定を締結することで、これまでから教育研究・防災・災害対応・広報等の分野において様々な取組を進めてきている。本日説明があった取組もその一つであり、それに関して頂いた意見、提言を踏まえ、平成27年度に策定した大綱「宇治市教育振興基本計画」の教育ビジョンに基づき、創意工夫により小中一貫教育の推進を図り、特色ある教育活動を展開し、学力向上に繋げてもらいたい。紹介のあった様な取組は、学力向上に通じることや親の環境作りが親子共通の話題になるという視点は、全国的にも大事なことである。是非宇治で実践して全国に発信し、素晴らしい「宇治学」副読本を、作り手の気持ちを乗せて子どもたちのために活用してもらいたい。

#### その他

#### <事務局>

次回の総合教育会議の日程は、決まり次第通知します。

### 【4】 閉会

閉 会 （午後11時20分）